

Teikyo University Hospital

チーム Tme

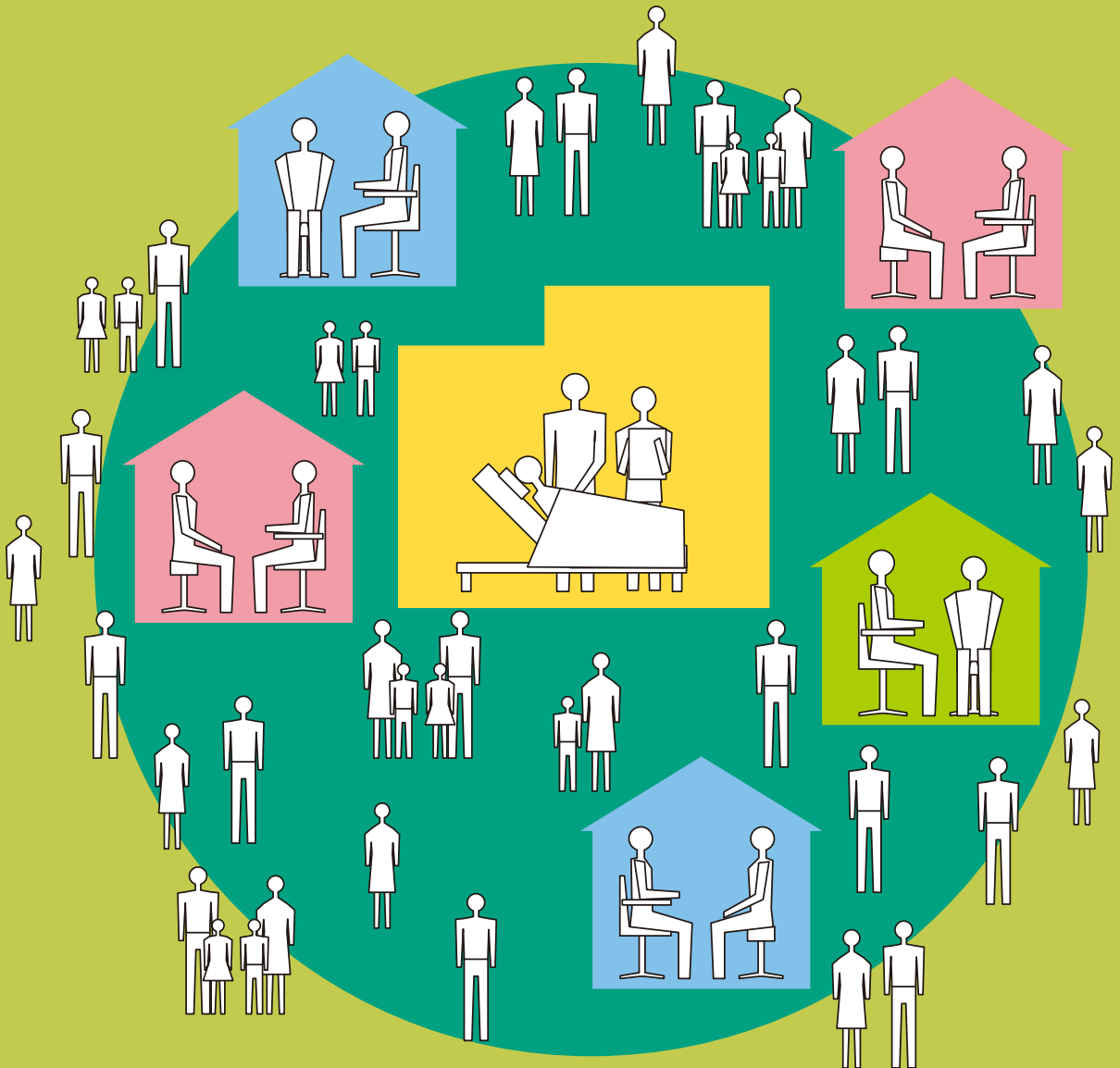
No.

11

帝京大学医学部附属病院
院内報

ご自由に
お持ち帰り下さい
Take Free

特集 地域で 支える医療





◎発行年月 2015年8月
◎発行 帝京大学医学部附属病院 広報企画課
◎編集・制作 アルケファクトリー

T-me

T-me[チーム]は、帝京大学医学部附属病院と地域の皆さまをつなぐ院内報です。
T:Teikeyo=帝京大学医学部附属病院の頭文字
me:Medical=地域の皆さまのための医療
また、「チーム」には医師、看護師、薬剤師、栄養士、その他病院全てのスタッフが連携して行うチーム医療の意味も込められています。



目次

連載:HISTORY 「日本の福祉の歴史」 02

特集 地域で支える医療

帝京大学医学部附属病院は「地域で支える医療」を推進しています。 03

医療連携・相談部 佐野圭二先生 06

医療福祉相談室 宮本博司さん 08

看護相談室 富田晴美さん 10

医療連携室 栗山剛樹さん 12

連載 チーム医療 医療サービス課／栄養部 16

Topics & News

帝京大学医学部附属病院からのお知らせ 18

HISTORY

日本の福祉の歴史

全ての国民に最低限の幸福と社会的援助を提供するのが「福祉」です。日本における福祉の誕生は、戦争と密接な関わりがあります。福祉制度は明治時代から昭和初期にかけて発展してきましたが、当時は貧民や弱者に対しては慈善的・救済的要素が強く、その他の国民に対しては富国強兵政策としての要素が強くありました。

明治初期に貧民や弱者保護のために福祉組合・救貧組合・相互扶助組合が作られました。理解は進みませんでした。本格的に国家の責務として始まったのは、第一次世界大戦後の敗戦処理としてです。まず復員軍人や遺族の経済問題に対処するよう「生活保護法」が作られ、続いて戦争孤児のため「児童福祉法」が制定、次に傷痍軍人などの救済のため「身体障害者福祉法」が施行されました。以上の3つの法律を「福祉三法」と呼び、その後

1960年代に現在でいう「知的障害者福祉法」「老人福祉法」「母子及び寡婦福祉法」が制定されました。これらをあわせて「福祉六法」といいます。

また明治時代から、官吏や軍人に対する恩給、官業労働者には退職年金がありました。民間労働者に対する公的年金制度はありませんでした。1942年に発足した「労働者年金保険制度」は、前年に発足した船員保険の年金制度とともに、最初の民間労働者を対象とする年金制度です。


日本において急速なスピードで進む少子高齢社会を背景として、2000年に介護保険法が施行されるなど、福祉政策はこれまでの措置制度から契約中心の制度へと大きく転換しました。2006年には障害者自立支援法が施行されることとなり、一連の改革は「社会福祉基礎構造改革」と呼ばれています。



特集



地域で支える医療



地域に暮らしている全ての方の
健康的な生活のために。
ひとつの病院だけで
ひとりの患者さんを
診るのではなく、
地域の病院が連携し、
協力して患者さんを
治療していくのが
「地域で支える医療」です。



帝京大学医学部附属病院は 「地域で支える医療」を 推進しています。

転院相談や福祉相談などを承る「医療福祉相談室」、在宅相談などを承る「看護相談室」、初診患者紹介や地域医療連携に関する広報活動を行っている「医療連携室」の3つをまとめた部署が「医療連携・相談部」です。「ふたり主治医制」など、地域の医療機関と協力しながら、よりよい医療が提供できるよう日々努めています。



医療福祉相談室 (P.08～)

お問い合わせ

TEL :03-3964-4031 (直通)

FAX:03-3964-9383

看護相談室 (P.10～)

お問い合わせ

TEL :03-3964-9073 (直通)

FAX:03-3964-9383

医療連携室 (P.12～)

お問い合わせ

TEL :03-3964-9830 (直通)

FAX:03-3964-9849



ふたり主治医制

患者さんの状況をよく知る「かかりつけ医」が日々の健康を管理します。症状が悪化したときに特定機能病院である当院へ紹介され、そして病状が落ち着いたらまた「かかりつけ医」で診るといって、「地域で支える医療」をかたちにしたものが「ふたり主治医制」です。

帝京大学病院を受診される患者さんへ

患者さん1人に『2人の主治医』！！

帝京大学病院ではご近所にかかりつけ医をお持ち頂く「ふたり主治医」制を推進しております

ご近所の「かかりつけ医」による紹介連携専門的治療を行います。状態が安定のものは、「かかりつけ医」で健康管理して頂きます。

医療連携の流れ

患者さん → かかりつけ医 (地域医療機関) → 紹介状 (診療内容、検査結果、入院、手術) → 専門病院 (帝京大学病院) → ふたり主治医制

ふだん患者さんの健康管理を行なっているご近所の「かかりつけ医」や密接に情報共有を行なっている「帝京大学病院医療連携登録医」などと連携し、機能分担を行なうことにより、「2人の主治医」で継続した医療を提供することを目指しています。皆様のご理解とご協力をお願いします。

帝京大学病院は「かかりつけ医」・「帝京大学医療連携登録医」とともに患者さんを見守ります！！

●当院は高度の医療提供を目的として厚生労働省の承認を受けた「特定機能病院」です。「救急・急性期医療」「がん医療」「産科の専門医療」を軸とした医療を推進しております。

帝京大学医学部附属病院 病院長

地域の病院が連携して患者さんを支えるのが「地域で支える医療」です

外科学講座の佐野圭二先生は、「医療連携・相談部」の部長となつて丸4年。「地域で支える医療」についてお話を伺いました。

『「地域で支える」とは、どのようにして患者さんを支えることなのか。帝京大学医学部附属病院のような大きな病院だけで患者さんを支えることはできませんし、地域の診療所だけでも患者さんを十分支えていくことは困難です。それぞれの役割分担をしっかりと自覚しながら、お互いをおぎないあうような形で患者さんを支えるということが、『地域で支える医療』の定義だと思えます。

私たちは、日常の食料品を買うためには近所のスーパーに行き、プレゼントなどスーパーに置いてないような特別なものを買うためにはデパートに行きますよね。医療も買い物と似たような面があります。病気になるたときは、まずお近くの診療所に行って相談し、状況に応じては大きな病院を紹介してもらい受診する。その後も病状やタイミングなどによって診療所と大きな病院とを使い分ける、ということが患者さんにとつても我々にとつてもベストな地域医療ではないかと思えます」

帝京大学医学部附属病院が

「地域で支える医療」において果たす役割

「当院は大学病院であり特定機能病院です。すぐに大きな処置が必要な

患者さんや、集中的な入院加療が必要な

患者さんに高度な医療がいつでも提供できるような体制を整えておくというの

が大切な役割のひとつです。ですから診療所で十分に治療いただけるような、あるいは外来で経過観察いただけるような患者さんは診療所にお願ひするというような連携で、帝京大学医学部附属病院がその責任を果たしていくべきだと考えています」

医療連携・相談部の今後の目標は？

「『地域で支える医療』の更なる拡大です。これまでも地域ぐるみで病院・診療所が一体となつて患者さんの治療を行なってきましたが、今後はそれを更に前進させたいと思っています。病気の患者さんの治療だけではなく、その前段階の『病気になるらないためにはどうすればいいか』、あるいは『早期発見のためにはどうすればいいか』を考え実践するということ

です。地域の医師会の先生方との連携のみならず、地域の企業などとも連携して、『健康維持』と『早期発見』を大きなテーマとした活動をはじめておりますし、今後も進めていきたいと思っています。(13ページ参照)



佐野 圭二先生
Sano Keiji
教授

1990年 東京大学医学部卒
1990年 東京大学医学部第二外科入局
2001年 東京大学肝臓外科助教
2004年 東京大学肝胆外科講師
2010年 帝京大学医学部外科学講座教授

また災害対策も大きな課題です。今年も国内で大きな地震があり、地震・災害に不安な思いを抱えている方は多いと思います。突発的な災害にも対応できるような体制を整え、地域の皆さんが安心できるようにしたいと思っています。坂本哲也主任教授をはじめとした救急医療の先生方にも協力いただいていますし、この課題に関しましては地域の医師会の先生方とも連携して進めておりますので、医療連携・相談部としてもできるだけサポートしていきたいと思っております」

スタッフにとってよい環境が

患者さんにとってもよい環境につながります

ありがたいことに、「帝京大学医学部附属病院の医療連携・相談部はよく連携をとってくれている」という評価を多くの皆様からいただきます。

「確かに看護師、ソーシャルワーカー、そして事務、それぞれのエキスパートがフットワークよく活動してくれています。ですが直接患者さんと接する医師や看護師、事務の方々を含め全職員によって『患者さんと家族とともに歩む医療』がなされなければ、今のような高い評価はいただけないわけです。現場で実際に医療連携を支えているのは病院で働いているスタッフの方々なので、われわれがまずすべきことはスタッフにとってよりよい環境をつくることであり、それが患者さんへのよりよい医療につながっていくと考えています」

「医療における『コンシエルジュ』を目指して

病気になる時など、今はインターネットである程度の情報を得ることはできますが、初めての体験に戸惑われる方は多いです。

「患者さんの置かれた状況はそれぞれ違い、さまざまな事柄について不安に思われることもあるでしょう。たとえば『在宅医療』や『訪問看護』などについてもあまり詳しくない方が多いと思います。そこで私たちが『医療におけるコンシエルジュ』として、親身になって患者さんのご希望を伺い、最適だと思われる選択肢をお示ししていきたいと思っています。何かわからないこと、不安なことがあれば、まずは窓口としてお気軽にご相談ください」

これからも医療福祉相談室、看護相談室、医療連携室が『医療連携・相談部』のひとつ看板のもとで協力し、患者さんのためのよりよい医療をご提案していきます。



医療福祉相談室

福祉とは、患者さんに有意義に
使ってほしいサービスです

医療福祉相談室にはソーシャルワーカーが6人在籍しており、患者さんに対して社会的な側面からの支援を行っています。課長補佐の宮本博司さんにお話を伺いました。

「病院には医療の専門職が揃いますが、私たちは福祉の専門職として業務を行っています。当院から退院される方と他の病院に転院される方は数多くいらっしゃいますが、その中には社会的にリスクの高いケースが含まれている場合があります。高齢者で单身の方が病気になるって入院される場合や、退院後にどう過ごされるか、また転院する場合。社会問題となっている少子高齢化に関係してきますが、板橋区には独居老人が増加している高島平団地がありますし、そのような患者さんが安心して健康に過ごせるように支援を行っています。

認知症状が出ている独居の方には成年後見人をつける必要が出てきますし、また生活にお困りの方は地域包括支援センターに繋ぎ、生活保護に該当する方であれば福祉事務所にご紹介するなど、看護相談室とも連携しながら福祉の部分のコーディネートをしています。地域のネットワークをスムーズに繋げるために、6人のソーシャルワーカーは北区と板橋区の各施設やセンターを訪問し、顔と顔を突き合わせて情報を共有

しています」

患者さんの今考えていることを
しっかりと受け止めます

患者さんにとって病気や入院という体験はショックなこと。冷静さを失っていたり、落ち込まれたりしている方も多いそう。

「少しでも安心していただくためには、私たち自身が常に安定した対応をすることが重要ですので、時間や気持ちの上でも余裕をもってお話しするように気をつけています。若い方から年配の方まで様々な方がいらっしゃいますが、先入

観を持つことなく、その方の気持ちをしっかりと受け止めた上で、私たちがお手伝いできることを明確に示したいと思っています。

大病院は、よくも悪くもスピーディに事が進みがちです。患者さんの状況をきちんと把握して、少し立ち止まる必要があれば丁寧に説明を



宮本 博司さん
Miyamoto Hiroshi
医療福祉相談室 課長補佐

1987年 明治学院大学社会学部卒業
2014年 帝京大学医学部附属病院入職
2014年 医療連携相談部 医療福祉相談室記属
資格 社会福祉士、介護支援専門員

行ったり、臨機応変に対応するように心掛けています」

福祉についてのお困りごとは

まず医療福祉相談室に

大きな組織ではセクションに分かれて仕事をする人が多いですが、帝京大学医学部附属病院はそれとは異なる体制をとっています。

「患者さんには初めての体験や聞き慣れない用語も多いでしょうから、どこで聞けばいいのかわからないお困りごともたくさんあると思います。『これは私の仕事ではありませんので他にお願ひします』ということでは患者さんも困りますし、解決まで逆に時間が掛かってしまうでしょう。」

そんな時、まず医療福祉相談室のソーシャルワーカーにご相談いただければ、さまざまな専門職に繋げて解決することができます。社会保険労務士や弁護士など専門家をご紹介いたしますし、また事務で解決できることであればそちらに話を通します。院内外のスタッフも、とにかく患者さんのことで困ったら、どんな些細なことでもいいのでご相談頂ければ、なにか糸口が見つかると思います」

今後少子高齢化はますます加速し、医療財源も限られている中で厳しい時代を迎えます。

「患者さんの自宅を訪問すると、飲まれていない薬剤が山積みになっていたということがありました。このことは、専門家が患者さんの意思や気持ち、状態をきちんと把握できていない例だと思えます。」

医療系の専門職は、介護福祉士とかケアマネージャーなどに比べると

敷居が高いように見えることがあるでしょう。ですが患者さんにとっては、医療も福祉も同じように使える、使ってほしいサービスだということ伝えていきたいです。そのために患者さんと地域の福祉系専門職をしっかりバトンを繋ぐことができるように、スムーズにコーディネートできるようなことが目標です。

そのために今後は院外の専門職と一緒に、また時には患者さんと一緒に考え、共に参加できる会議の企画なども積極的にやっています。硬直した組織ではない、新しい大病院像を帝京大学医学部附属病院が示していくように頑張りますので、患者さんにも温かい目で見てください」と

医療福祉相談室がもっと大きな役割を果たしていけるように努めていきたいと、優しい笑顔で語ってくれました。



看護相談室

患者さんが叶えたい「思い」のために
全力を尽くしています

看護相談室は、在宅看護・介護保険・福祉用具・医療機器等についての相談を承る部署。退院した後、在宅療養に安心して移行できるように、院内と院外の橋渡しを行っています。主任の富田晴美さんにお話を伺いました。

「看護相談室では、退院後も療養が必要な場合、在宅の先生はどこで探すのか、必要な医療機器はどこで手に入れられるのか、使い方はどうするのか、また介護保険とは何なのか等、どうしてよいかわからないことに対して、制度や社会資源の利用法、医療機器の使用法、医療機関のご紹介などを主に行っています。」

また、院内と院外のそれぞれの部署との橋渡しを行い、問題がスムーズに解決できるよう調整も行っていきます。退院の際は、自宅へ戻っても不安なく過ごせるよう、外部の医療・介護・福祉関係の方を病院へ招き、ご本人やご家族を交えて退院のための話し合いをしています。退院後はこんな風に過ごしたいという希望も伝えられ、病院でどのような治療がされていたのか、どんな医療機器を使って帰るのか相互に勉強、確認し合い、しっかりバトンを渡します。退院後お世話になる方々と顔見知りにもなれ、医療関係者だけでなく、患者さんやご家族からも好評

です。

皆さん生活背景も違いますが、「家で過ごしたい』『家で見てあげたい』というお互いの思いは変わりません。希望が叶えられるよう最善を尽くしていきます」

「一番大事なのは、お家へ帰ってから
どう過ごされたいかということ」

「旅行がしたいという希望であれば、旅行先まで私達が連絡を取る事もあります。ホテルに『酸素吸入や点滴が必ず必要な方です』という連絡をしたり、万が一ご病状が悪くなった場合に備えてご旅行先の病院をチェックします。病状を記した手紙を担当医に書いてもら

富田 晴美さん
Tomita Harumi
看護相談室 主任

1986年 帝京高等看護学院卒
同年 帝京大学医学部附属病院入職
2000年 帝京大学医学部附属病院
医療連携・相談部 看護相談室配属





い、相手の病院に連絡を取りながら、楽しい旅行ができるよう計らいます。必要があれば、外部の訪問看護師を同行させるという調整もします。

痰を引く器械を持って遊園地や花見に行かれ、『楽しかったよ』とても嬉しそうに帰ってこられるということもあります。付き添うご家族の方も緊張すると思いますので、帰って来るまでの段取りや機器の使用法はきちんと指導致します」

長年看護師を勤めている富田さん。心に残る体験は数多くあります。

「退院できない病状でも、庭の花の手入れをしたい、自宅の窓から見慣れた景色を見たい、家族と旅行がしたい、魚釣りに行きたい、愛犬と過

ごしたい、何より大切な家族と一緒に過ごすために家に帰りたいとおっしゃる方々が今までたくさんいらっしゃいました。主治医や病棟の看護師、理学療法士、薬剤師、在宅医や訪問看護師時には行政とネットワークを組み、望まれる生活をサポートしてきました。

また、小児で人工呼吸器装着して退院をした方が、退院後年月が経つから、『中学生になりましたよ』とご家族からお手紙をいただいた時。それはスタッフ全員の励みになりました」

もっともっと皆さんが利用しやすい場になることが

看護相談室の今後の目標

「退院する患者さんには『これからはお家でゆっくりして下さいね、周りの人も支えていますから大丈夫ですよ』と声をかけお送りしています。退院後、病状が悪くなった場合、いつでもお受け入れができたり、行く先を前に見つけたりと、安心した療養生活を支えてゆきたいと思えます。今後は更にネットワークを広げて、少しでも自宅での生活が長く過ごせるように努力してゆきます。

病気のことや療養生活について、最初から慣れている方はいらっしやいません。お困りのことがあれば看護相談室をぜひお気軽に訪ねてほしいと思います。ちよっとした疑問でも可能な限りお答えしますので、何かあればお気軽に立ち寄っていただけるような窓口でありたいというのが看護相談室全員の思いです」

看護相談室は、皆さんの不安を取り除く『相談窓口』として、今後も幅広く活動してゆきます。

医療連携室

「地域で支える医療」発展のために
サポートするのが医療連携室の役割です

医療連携室とは、その名前の通り「さまざまな連携をとる部署」。地域の医療機関と院内のニーズを調整し、橋渡しをしている栗山剛樹さんにお話を伺いました。

「『医療連携室の業務』と一言でいっても幅広いですが、医療機関からの様々な問い合わせ、紹介患者さんの初診予約電話対応、データの構築、地域連携に関する広報活動などを主に行っております。また、2015年3月より医療連携カウンターを設置し、外来患者さんの逆紹介の際にそれぞれの患者さんの状況にあった、かかりつけ医の紹介も行っています。

また、私は地域医療機関訪問も行っており、当院の現状と地域医療機関のニーズをすり合せ、院内外に情報発信しています。加えて、帝京大学医学部附属病院の広報誌『医療連携だよりアシスト』や『診療科案内』の作成、医師、コメディカルを対象とした『講演会』、健康啓発を目的とした『市民フォーラム』なども企画しております」

「地域で支える医療」の第一歩が

「ふたり主治医制」です

「この地域には数多くの病院・診療所があり、地域医療機関の先生方も

連携に対し非常に協力的で、『地域で

支える医療』を発展させるには他に類を見ない最適な地区だと思います。通常は患者さんの状況をよく知る『かかりつけ医』に日々の健康管理をしていただき、症状が悪化したときには特定機能病院である当院へ紹介。そして病状が落ち着いたらまた『かかりつけ医』でという、『地域で支える医療』をかたちにしたものが『ふたり主治医制』です。

もちろん患者さんが安心して充実した医療を受けられるよう、地域医療機関と定期的に勉強会や講演会を開催し、常に連携を取っています。ふたり主治医制は『2人の先生が4つの目』で患者さんを見守っていますので、安心感も2倍です。とにかく患者さんには、健康を管理する『かかりつけ医』を持つてほしいということだと思います」



栗山 剛樹さん
Kuriyama Gouki
医療連携室 係長

東京都杉並区生まれ。
立教中学・高校から
帝京大学経済学部経済学科に進学。
卒業後、旅行代理店に入社し、
添乗業務・企画営業職を経て
2006年より学校法人帝京大学に入職。

サポート、プロデュース、マネージメントなど

医療連携室にはいくつもの顔があり役割があります

「元々『地域で支える医療』という概念を医療連携室のコンセプトとして打ち出し、それをかたちにするために『医療連携セミナー』の開催、『医療連携登録医制度』、『ふたり主治医制』をスタートさせました。『ふたり主治医制』については、最初は患者さんに理解してもらえないこともありましたが、先生方や看護師さんをはじめとした現場スタッフの皆様のおかげで現在ではかなり浸透してきました。

また、最近はこのように取り組みをしている『当科は〇〇には絶対的に自信がある』などとセミナーや勉強会で先生自ら発表して下さることが増え、先生方の連携に対しての意識の高さを非常に感じます。実際、地域医療機関を訪問しても、『帝京は〇〇だから…』『帝京か…』などと以前は嫌な顔をされることもありましたが、最近では、『帝京はがんばっているね』『先生の意識が違うね』などと言われることも増え、地域医療機関の先生方へも伝わっていることを肌で感じとれます」

ますます信頼される部署にしていくため

「誠実」「アクティブ」「チャレンジ」をモットーに

よりの確な連携のため、時代の流れを素早く察知し、対応していくことが重要なポイントと言えるでしょう。

「種まきの時期は終わりました。今後はこれらを育て、さらに実践的なものに発展させる時期に入ってきていると思います。合わせて地域の皆様の健康啓発を目的とした活動にも力を注いでいきたいと考えております。これは健康にまだあまり興味のない方々に少しでも健康を意識していただき、病気の早期発見につなげたいとの思いからです。医療連携室

では例年板橋区とともに『板橋シテイマラソン』でのがん検診啓発事業や市民フォーラムを開催しております。市民フォーラムに関してはそのような方々に少しでもご参加いただきたいと、2014年『予防から治療までーあなたの健康見守ります！』と題し、長年医療連携、相談部長を務められた帝京大学臨床研究センター長の寺本民生先生、循環器内科助教紺野久美子先生、理学療法士西川淳一先生による講演・

実演と合わせて、同じ板橋区の健康総合企業『株式会社タニタ』の協力で一味変わったカロリーコントロールについてもお話しいただきました。結果400名以上の申し込みがあり、少しはQOLの向上につながったのではないかと思います。

近年の医療制度改革により『連携』とひとことで言っても数年前とは目まぐるしく変化を遂げており、『昨日の常識は今日の非常識』になっていることも多々あります。今後は高齢化社会へ向けた『地域包括ケア』なども踏まえ、より多職種間がコミュニケーションをとることで、『地域で支える医療』とともに『地域で支える生活』の一助となるようサポートしていければと考えています」

2016年帝京大学は創立50周年を迎えます。患者さんの生活の中で、より一層信頼され、「病状が悪化した時は帝京にかかりたい」といわれるような病院になるよう、医師、コメディカル、事務、全職員がタッグを組んで新たな未来を構築していきます。

TEIKYO 健康サポートフォーラム
あなたの健康見守ります!

日時:平成26年6月28日(土) 13:00-15:30
場所:帝京大学本館様 臨床大講堂
対象者:どなたでもご参加いただけます。(事前申込制)
参加費:無料

参加ご希望の方は、
病院1F初診受付にてお申込みいただけます
お問い合わせ:帝京大学医学部附属病院 医療連携室
TEL.03-3964-9830(受付時00-16:30)

ある日の医療連携室

院内・院外で、さまざまな役割を果たしている医療連携室。一日の活動に密着しました。

AM



電話対応



紹介初診患者さんの予約電話、院内外からの問合せなど1日130本ほどの電話があります。



データ管理、スキャン



診療情報提供書の病名を登録し、現在どの病名での患者さんが多いか、どこの地域医療機関からの紹介が多いかなどのデータを構築し検証しています。

また紹介患者さんがお持ちの診療情報提供書を電子カルテに取り込むことを「スキャン」といい、この作業も毎日行います。



医療連携カウンター



医療連携カウンターでは、患者さんの症状が落ち着いた際、患者さんの状態にあった地域医療機関をご紹介します。

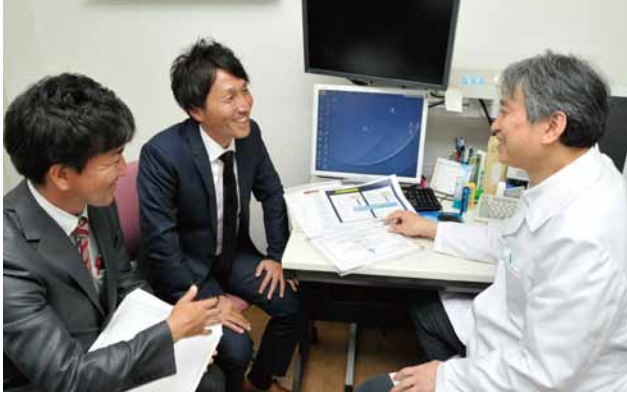


さまざまな打ち合わせ



地域医療機関の要望についてのすり合わせや、次号の医療連携だよりアシストのテーマ、講演会・勉強会についての打ち合わせも行います。





医療機関訪問

地域の先生方に「医療連携登録医」のご説明や講演会のご案内などを行います。また、当院に対する忌憚ないご意見を伺います。

午後の診療開始前に合わせて医療機関を訪問します。今回は、水野医院の訪問に同行しました。

水野先生は2015年6月より板橋区医師会会長に就任されました。帝京大学医学部の卒業生でもあります。お時間をいただき、帝京大学医学部附属病院の地域連携への取り組みについてインタビューに応じていただきました。

「現在、地域連携が重要視されていますが、多くの医療機関が帝京大学病院を参考にしています。まさに、地域連携のオピニオンリーダーと言えるのではないかと思います」



板橋区医師会 会長
水野医院
水野重樹先生



講演会・勉強会

当院のある板橋区だけでなく、北区、豊島区、練馬区、川口市、蕨・戸田市等近隣の医師会と連携して講演会・勉強会を開催しています。

企画の段階から、全ての運営に携わります。先生方の講演終了後には、当院の現状や最新の情報などをご案内します。



「医療連携室と一緒に、講演会や勉強会などの立ち上げに関わりました。地域の医療機関、帝京の医師、医療連携室には垣根がなく、お互いに信頼関係が築けています。今後も積極的な活動に期待しています」

板橋区医師会 学術部・広報部兼任理事
おおの内科クリニック
大野安実先生

**医療連携・相談部は、これからも患者さんのため・地域の方々のために
「医療におけるコンシェルジュ」として全力を尽くします！**

患者サービス向上のために

医療サービス課 (初診会計係) 根岸希三子さん
(入退院受付係) 村上智史さん

医療サービス課では、窓口業務や受付業務などを行っています。

根岸「私は初診・会計係で主に窓口業務全般と患者さんの基本情報の登録を中心に業務を行っています。初診受付は患者さんが最初に立ち寄る場所ですので、病院に対する第一印象が私たちスタッフにかかっています。患者さんに目を配りながら窓口の状況を把握し、統一された案内ができるように努めています」

村上「私は病床管理を担当しています。現在の病床数は1082床あり、患者さんの病状や部屋希望等を踏まえて看護師長と連携を取り、どのベッドにご案内するかを決めています。入院患者さんが1000人を超える日もあり、以前の入退院受付係では1時間以上の待ち時間が発生することがありました。時間短縮のため手続きを簡略化して無駄を省き、退院時には自動支払い機の活用を促進した結果待ち時間が半減し、あまり患者さんをお待たせせずに済むようになりました」



事務スタッフの対応が患者さんの気持ちにも影響してきます。よりよい診療環境を提供し、チーム医療に貢献したいという思いです。

根岸「以前、外来受付を担当していた時に、患者さんからお褒めの言葉が書かれたお手紙をいただき、とても

うれしかったことがあります。まだ若く経験不足で至らないことも多く、この仕事を続けられるのかなと悩んでいた時期でもあったので、とても励みになりました」

今後の目標は、院内環境を更によくしていくことです。

村上「現在患者さんのニーズは多様化し、医療を取り巻く環境も大きく変化しています。今後は病院経営の視点や医療に関する知識も身につけ、常に情報を更新しながら、チーム医療の一角を担っていきたいと思っています」

根岸「事務職は治療行為はできませんが、患者さんに最も近い距離にいると思います。患者さんに『きれいな病院ね』とおっしゃっていただけですがありますが、建物だけが立派だと言われないよう、心を込めてご対応したいと思っています」

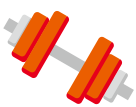


MY HOBBY

(根岸) 友達とたわいもない話をしながらおいしいご飯を食べているのが一番リフレッシュできる時間です。辛いものが特に好きです。



(村上) 30代になりお腹がぼっこりしてきたので、ダイエットをしています。2カ月くらいでベルトの穴2個分くらいは引き締まりました！



根岸 希三子さん
Negishi Kimiko
1998年 帝京大学医学部附属病院入職

村上 智史さん
Murakami Satoshi
2004年 青山学院大学卒業
2008年 帝京大学医学部附属病院入職

質の高い医療を栄養管理で提供

管理栄養士 服部綾香さん

栄養部の服部綾香さんは、個人栄養指導の他に、糖尿病教室や心臓リハビリテーションセンターで講義を行っています。最も大事にしていることは、周りのスタッフや患者さんとのコミュニケーション。

「質の高い医療を提供するために、医師、看護師、薬剤師、検査技師、理学療法士、作業療法士などの多職種で栄養管理を行う栄養サポートチームNST (Nutrition Support Team) で意見交換をしっかりと行っています。意見交換の成果が患者さんに提供される食事となるので、調理師とも日々コミュニケーションをとっています。」

以前は血液内科を担当していたのですが、抗がん剤を使うため食欲のない患者さんが多くいらっしゃいました。病棟訪問を重ね、患者さんにお話を伺って食べられそうなものを探りながら、食に関する提案を差し上げました。その後「あの時のお話のおかげで食べられるようになりました」と言っていた時は、管理栄養士としての確

なアドバイスができたのかなと思ひ、私もうれしく思いました。患者さん一人ひとりの病状・病態に合った、入院時の献立を考えるのも栄養部の大事な仕事です。

「普段の献立とは別に、3月のひ

なまつりにはちらしずし、クリスマスにはチキンとケーキ等、季節感が感じられる行事食も取り入れています。お子様にはキャラクタールをかたどったメニューを入れたり、栄養面はもちろんですが楽しく食事ができるよう気をつけています」

管理栄養士として専門的な知識を患者さんに提供するために、もっとスキルを高めていきたいと思っています。

「個人栄養指導において、例えば塩分を控えないといけない患者さんに、ただ「減塩してください」と言うだけでは難しい部分があります。塩辛い漬け物が好きな方には、その代わりに味噌汁の塩分を控える、焼き魚には醤油ではなくてポン酢をかけるというメリハリをつけて、トータルで減塩していただくようお話しています。」

食事制限が必要な方、逆に食欲がなくて困っている方等、食に関する悩みは多いと思います。なるべく患者さんの負担が少ないような提案を致します

ので、何かお困りのことがあったら気軽に相談してほしいと思います」

MY HOBBY



お菓子やパンを作るのが趣味です。最近作ったのは、甘く煮込んだオレンジにチョコレートをつける「オランジェ」。

服部 綾香さん
Hattori Ayaka

2012年 大妻女子大学 卒業
2012年 帝京大学医学部附属病院 栄養部 入職
資格 管理栄養士、糖尿病療養指導士



地域と連携してCKD(慢性腎臓病)治療にあたっています

腎臓内科の内田俊也教授と藤垣嘉秀病院教授を中心としたチームより、CKDの治療や予防についてお知らせします。

内科 教授 内田俊也

CKDとは

「慢性に経過するすべての腎臓病をまとめてCKDと呼んでいます。日本では成人の8人に1人が患者だとされ、「新たな国民病」ともいわれています。腎臓病の原因には高血圧や糖尿病や膠原病があげられま



(右から)
看護師 三村紀子主任
内科 藤垣嘉秀病院教授
内科 内田俊也教授
栄養部 濱口加奈江さん
薬剤部 重森梓さん

すが、いずれも徐々に腎機能が低下して、最終的に透析療法に至るという一定の道筋をたどります。ですから原因疾患は問わずに、慢性腎臓病の悪化を防ぐことができないうか2004年にCKDの概念が提唱されました。CKDから透析治療に至るだけではなく心臓疾患や脳卒中の原因にもなります。そのためCKDの考え方および早期発見・早期介入の重要性が認識されるようになりました」

自覚症状について

「自覚症状はほとんど現れませんが、進行するとむくみや夜間尿、息切れ、血圧上昇などの症状が現れてきますが、それらは年齢のせいだと片付けられがちです。しかし、朝おきてもむくみがとれない、夜中のトイレ回数が増えてき

たら、CKDのサインかもとらえてほしいです」

内科 病院教授 藤垣嘉秀

CKDの診断方法

「蛋白尿などの腎臓の異常があること」、もしくは、「血液検査から計算した推算糸球体濾過量(老廃物をどれくらい尿へ排泄する能力が腎臓にあるのかを示す値)の低下」によってCKDなのかどうか、またどの程度進行しているかが推定できます。推算糸球体濾過量は数値が指標になりますので、腎臓の専門ではないかかりつけの先生にも診断できますし、健康診断でもCKDかどうかかわかり、悪化する前の初期段階で見つけることが可能です」

治療体制について

「患者さんには通常はかかりつけ医に通っていただき、先ほどの診断基準に当てはまれば私たちがチームで治療にあたります。そのために『CKD地域医療連携会議』において、病院・保健所・板橋区医師会の方々と連携基準を作成しました。それを土台としてCKDの知識や予防の啓発をし、スムーズな病診連携体制を作っていきたいと思っています。また、2014年から帝京大学病院内でCKD教室を年4回開催しています」

今回紹介するチーム以外でも、地域連携においてはソーシャルワーカーの役割も大きいです。ロスなく切れ目なく、チームワークを発揮しながら治療していきたいと思っています」

栄養部 濱口加奈江

腎臓病の進行を防ぐため、また予防のために食事面で気をつけた方がよいこと

「糖尿病の方は血糖コントロール、肥満の方は減量することが主なポイントとなります。また、高血圧の方は特に減塩が重要です。日本人の食塩摂取量は1日平均11gと多く、生活習慣病予防の観点から、一般男

Topics & News

性は8g未満、女性は7g未満、高血圧の方は6g未満が望ましいとされています。食事療法は腎臓病の患者にとって、10種類の薬に負けないくらいの重要性があります。病状の初期の段階から、患者さん一人ひとりに合わせた食事のアドバイス、生活のアドバイスをしていきたいと思っています。」

看護師 主任 三村紀子

CKD治療における、看護師の役割

「透析などの血液浄化療法を行っている腎センターで、末期腎不全になり透析治療が必要になった患者さんへの看護を提供しています。看護師は患者さんに寄り添い直接お話をうかがい、希望する治療が安全に受けられるようサポートしています。また、血液透析療法が膜透析療法の療法選択が必要になった患者さんには個別に説明を行い、患者さん自身で治療法を決定できるよう支援しています。」

「今後は院内で年4回開かれていくCKD教室において、積極的に看護師からの情報提供をしていきたいと思っています。地域の病院の看護師の方々と情報交換などを行い、地域連携に参画していきたいと思っています」

薬剤部 重森梓

腎臓病の方が薬を使用する際、どのような注意が必要か

「腎臓の悪い方には薬の制限があり、使えない薬も多くあります。市販の痛み止めや風邪薬にも腎機能が悪化する成分が入っている場合がありますので、薬剤師が気をつけるのはもちろん、患者さん自身にも避けなければいけない成分を知っていただくことが必要です。」

「現状ではまだ難しいですが、将来的には個々の患者さんの腎機能がどれだけ悪いのか、地域の薬局薬剤師も把握できるようなシステムづくりを進めていけたらという望みがあります」

「CKDの患者さんをサポートするため、多くの職種が協力して診療にあたっています。帝京大学医学部附属病院は、今後も一人でも多くの患者さんに喜んでいただけるような診療を、チームで提供していきます。」

医療についての知識を深める動画サイト 「帝京メディカル」が新しくなりました

帝京大学医学部附属病院では、当院の医師が専門分野の疾患や治療方法について、詳しく解説する動画サイト「帝京メディカル」を制作しています。

「帝京メディカル」は、病気の症状や予防法、最新の検査や治療方法についてポイントを絞り、簡潔に7分〜8分にまとめています。

Timeで今取り上げた「CKD」や「乾癬」「うつ病」など気になる病気について掲載しています。

「帝京メディカル」の各コンテンツは

帝京大学医学部附属病院のホームページ

「05病院のご案内」↓「帝京メディカル」

より閲覧できます。ぜひご覧ください。



URL <http://www.teikyo-hospital.jp/>

帝京大学病院

検索



帝京大学医学部附属病院

〒173-8606 東京都板橋区加賀2-11-1

TEL.03-3964-1211 (代表)

<http://www.teikyo-hospital.jp/>

院内報についてのお問い合わせ先
帝京大学医学部附属病院 広報委員会
E-mail:kohoiin@med.teikyo-u.ac.jp